

第 10 章 誓願の発心の学処 Training in Aspiration Bodhicitta

発心してからの学処

- 1) 誓願の発菩提心の学処
- 2) 発趣の発菩提心の学処 →第 11 章 六波羅蜜の設定

1) 誓願の発菩提心の学処

- ・有情を見捨てないこと
- ・利徳を念ずること
- ・二つの資糧を集積すること
- ・たびたび菩提心を修治すること **p184-18 行目～ p 186**
 - 正覚の因の心を修治すること
 - 正覚そのものの心を修治する
 - 菩提行の心を修治する
- ・白黒の八つの法を取捨すること

本文：たびたび菩提心を修治すること

第四：「たびたび菩提心を修治することを学ぶ」という、その菩提心が増長するその方便を説明するなら、『菩提道灯論』にもまた「誓願の菩提心を生じてから、多くの努力でもって増長させよう。」と説かれています。

それもまた、

- 1) 正覚の因の心を修治することと、
- 2) 正覚そのものの心を修治することと、
- 3) 菩提行の心を修治することと

[、合計]三つと知るべきです。その三つについて修治したことにより、その菩提心は増長するのです。

4.Practicing the Enlightened Mind. Fourth,practicing the enlightened mind repeatedly is the method for deepening bodhicitta.The *Lamp for the Path to Enlightenment* says:

After developing aspiration bodhicitta,

One should make a great effort to deepen it.

In this,there are three topics:practicing the mind of the cause of enlightenent,practicing the mind of actual enlightenent,and practicing the mind of the action of enlightenent.Practicing these three deepens bodhicitta.

修治	修めること。修め取り締まること。
方便	真実の教えに導くためのてだてとして仮に用いる手段としての教え。世の人を救い、悟りに導くために一時、手段として用いる方法。
誓願	誓いを立てること。仏・菩薩が衆生救済の誓いを立てること。またその誓い。
正覚	正しい仏の悟り。
菩提行	悟りを得るための実践、修行。

試訳：たびたび菩提心を修治すること

第四：**菩提心を繰り返し実践すること**が、**菩提心を深めていく方法**です。『菩提道灯論』に「誓願の菩提心を生じた後に、多くの努力でもって深めていくべきです。」と説かれています。

それもまた、

- 1) 仏の悟りの因となる心を実践すること、
- 2) 実際の仏の悟りの心を実践すること、
- 3) 菩提行の心を実践すること

これらの三つを繰り返し実践することで、菩提心を深めていきます。

本文：正覚の因の心を修治すること practicing the mind of the cause of enlightenment

そのうち、第一[：正覚の因の心を修治すること]は、諸々の有情に**慈と悲の心**を常に**思惟**する、またはたとえ[修行の一座・]**更の度量**の中にも一回、思惟するのです。

For the first, persistently develop loving-kindness and compassion toward all beings at least once each session.

前回の本文中の訳註 2 より **更の度量**…修行時間のこと

慈心	いつくしむ心。楽しみを与える心。
悲心	あわれむ心。人の苦しみをあわれみ、除こうとする心。
思惟	考えをめぐらすこと。思いはからうこと。対象を分別すること。

試訳：正覚の因の心を修治すること

そのうち、第一：[仏の悟りの因となる心を実践すること]とは、少なくとも修行時間ごとに1回、**一切衆生に対する慈心と悲心を常に思惟します。**

■一切衆生に対する慈心と悲心を常に思惟します

「五重の道のマハームドラーの前行」テキスト 日本ガルチェン協会 p54-55 より

特別の前行 慈悲と菩提心の観修

【第一 慈心の観修】

虚空と等しき母なる有情たち | すべての樂も喜び吉祥も |
利他の心がもとで起こりくる | いつでも慈愛の心を持つように |

このように唱えて、まず汝の恩ある母のことを思惟せよ。母には、やさしく汝を養育したなどの四つの大恩がある。続いて、その他の有情が過去生に汝の母であったときに、今生の母と同じようにやさしく汝を養育した恩を思惟せよ。最後に、一切有情がすべて樂と樂の因である慈愛の心をもつよう、作り物でない本物の願う心が生じるまで思惟せよ。

【第二 悲心の観修】

虚空と等しき母なる有情たち | 激しき六道 DUHKHA の苦の因は |
無明と我執ぞ、これらが鎮まりて | 利他の悲心を皆が持つことを |

このように唱えて、まず有情が激しい苦悩を体験していることに思いをいたし、彼らをあたかも自分の母であるかのごとくにイメージすれば、悲心がどうしようもなく感じられるであろう。そうしてから、「あの人はこの生でのわが母ではないけれども、過去生において確かにわが母であった」と考え、最後に、「苦悩にさいなまれる一切有情で、わが母でなかったものはいない」と考えて、彼らすべてが苦と苦因である我執を離れるように、大いなる悲心を生起させるよう努力せよ。

本文：正覚そのものの心を修治する practicing the mind of actual enlightenment

[第二:]正覚そのものの心を修治することは、有情のために仏陀[の位]を得たいと欲する知により、昼三回、夜三回に思惟する、または発心の儀軌を広汎に為す、またはたとえ更の度量の中においても、「仏と法と最上の衆に正覚まで私は帰依します。私は施しなど為したこれらにより、[世の]衆生を益するために仏陀を成就しよう！」と述べるのです。

The practice of actual enlightenment is the desire to obtain enlightenment for the benefit of sentient beings. Contemplate this three times in the daytime and three times at night. Use the detailed ceremony for cultivation of bodhicitta or at least repeat the following once each session:

I take refuge in the Buddha, the Dharma, and the Sangha until I achieve enlightenment. By the merit of generosity and other good deeds, may I attain enlightenment for the benefit of all beings.

試訳：正覚そのものの心を修治する

[第二:]実際の仏の悟りの心を実践することとは、一切衆生の利益のために悟りを得たいという願望のことです。昼に三度、夜に三度これを熟考します。菩提心を育むための詳細な儀軌を使用するか、少なくとも各セッションに1回、以下を繰り返します。

ブッダとダルマと（聖なる）サンガとに
菩提を得るまで帰依したてまつる
わが積みきたる布施など福德で
衆生のためにブッダになることを

(帰依と発心の祈り「五重の道のマハームドラーの前行」テキスト 日本ガルチェン協会 p2)

【参考】

「ラムリム伝授録II」共著 ゲシェー・ソナム・ギャルツェン・ゴンタ、藤田省吾 チベット仏教普及協会 p176

今生において菩提心（発願心）を維持するには、一日に六座（昼に三度、夜に三度）菩薩としての誓願を繰り返すことが重要とされている。儀規の次第通りに誓願するのが望ましいが、できないときにはしょうじゆ聖衆の集まりである集会樹を観想し、供養し、慈悲に基づく「因果の七秘訣」や「自他の交換」の瞑想によって菩提心を起こす訓練を一日に六度行なう。そして、帰依と発心の偽文^{げもん}を三度誦えるのだ。

仏・法・僧の三宝に菩提を得るまで帰依いたします。
布施など（六波羅蜜）の功德を積み、
（一切の）衆生の（利益を実現する）ために、仏陀を成就いたします。

これを昼に三度、夜に三度繰り返すことが必要だとしている。

■集会樹を観想

「五重の道のマホームドラーの前行」テキスト 日本ガルチェン協会 p21-24

共通でない前行 第一 帰依

共通でない（不共の）前行には四つの項目があるが、その第一は、三宝の保護のもとに入ることであり、すなわち帰依である。帰依は仏法に入るための入口である。三宝に対し完全な信頼をもって、疑うことなく帰依することの福德は、計り知れないものである。『般若摂頌』にいわく、「帰依の福德形があるならば | 三界さえも入れるに小さすぎ」と。『法華経』にいわく、「僧であれ俗であれ、この賢劫にわが教えに入る者は誰であれ、残りなく涅槃に入るであろう」と。これらも帰依と発心を思われてのことである。

「虚空のごとき一切有情を輪廻の苦海から済度するため、三宝に帰依しよう」と心に念じて発心して、まず帰依の対象を明確にイメージせよ。

前なる海中如意の宝樹あり | 中央宝座の蓮華と月の上 |
すべてのブツダの上師持金剛 | カギユの成就者海と取り囲み |
前には世尊チャクラサンヴァラと | 四六のタントラ本尊天衆と |
右には三世諸仏が荘厳し | 賢劫千仏ともに座られて |
後ろは般若波羅蜜大仏母 | 顕密法話がおのずと説かれおり |
左は守護の三族菩薩たち | 尊き三乗サンガに囲まれて |
周りをかこむ守護神たちの海 | 雲のごとくに集まり輝けり |

このように帰依の対象を眼前に明確にイメージし、汝と無量の一切有情とが、帰依の対象に対して、今より菩提を得るまでの間、身・語・意で恭敬し帰依し頂礼すると思惟せよ。

南無 | 真実上師の諸仏の法身と | 自性報身本尊正法と |
悲心の忒身空行僧衆らに | 菩提を得るまで帰依したてまつる |

念誦と心相続を融合させることによって、帰依し頂礼せよ。そのあと、

われと虚空と等しき無量の有情たちの |
心が法に向くよう加持したまわんことを | 法が道に導くよう加持し給わんことを |
道が錯乱を浄化するよう加持したまわんことを |
錯乱が智慧に変わるよう加持したまわんことを |

強い信心をもって祈願することで、資糧の福田が汝の中に五色の光となって融け入り、心相続が加持されたと考えて、所縁のない境地にしばらく止まれ。

■菩提心を繰り返し実践すること

「五重の道のマハームドラーの前行」テキスト 日本ガルチェン協会 p14-15

【菩提心をおこす】

われを恨む怨敵も | 妨害する邪鬼も |
解脱と全智の障害となる一切の者たちも |
虚空と等しき母なる一切有情なれば樂を得んことを | 苦を離れんことを |
すみやかに無上正等菩提宝を得んことを |

さらに

それゆえブツダにならざる間は身語意三門の善業を積まん
死に至らざる間は身語意三門の善業を積まん
今より明日のこのころまでの間は身語意三門の善業を積まん

と唱えて、すぐれた菩提心をおこせ。

「五重の道のマハームドラーの前行」テキスト 日本ガルチェン協会 p56-57, p64

特別の前行 慈悲と菩提心の観修

【第三 菩提心の観修】

果位での誓戒は菩提心を願うことであり、因位での誓戒は菩提心を行うことである。この願いと行いの二つの誓戒を『大発菩提心（トゥキェチェンモ）』に従って行なうにせよ、あるいはより簡略な儀軌を用いるにせよ、どのように修行すべきかをよく解って行なうべきである。

自分のために無数の生涯で | 畏怖や苦痛や災厄うけたれば |
母らが有海を離れられるよう | 菩提のすぐれた道に入るべし |

これを何度も唱えて、慈悲の心と菩提心を汝の心相統の内に生起させよ。汝のすべての日常生活で「一切有情の利益と幸福のためにできるかぎりのことをしよう」と願うことから心を離さないようにせよ。このようになれば、菩薩戒のすべての教訓はそこに集まり、なすことすべては六波羅蜜の行になるであろう。そのように行なう利益は無量である。『華嚴経』にいわく、「菩提心という純粋な功德の蔵から三世の一切諸仏は生まれたもうた。世間の一切有情の樂もここから生じる。ブツダが賞賛される一切の美点もここから生じる。これにより世間の一切の障礙を取り去る。そして疑いなく勝者ブツダとなるのである」と。さらにジクテン・スムゴン大師は『ゴンチク』の中で、「仏陀とは菩提心の化身である」とおっしゃった。菩提心があれば、ブツダにならないではおれないのだ。菩提心がなければ、どんなに修行しても、生起次第をしようとして究竟次第をしようとして、その他なにをしようとして、ただ影のように消えてしまうのである。それゆえ、三つの特別な前行はすべての道の根本であるから、汝の心相統の中に菩提心が確かに生まれるまで、しっかりと実習しなければならない。

【菩提心の祈り】

菩提心なる最勝宝 | まだ生ぜずば生ずべし |
生じて減じることはなく | ますます増大せんことを |

本文：菩提行の心を修治する practicing the mind of the action of enlightenment

[第三:]菩提行の心を修治するには二つ、

- 1) 他者を益する心を修治することと、
- 2) 自相續を浄める心を修治することです。

そのうち、第一[：他者を益する心を修治すること]は、自己の身体と[受用すべき]資財と[過去・未来・現在の]三世の善根すべてを、他者の益・楽のために廻向し、施す心を生ずるのです。

[第二:]自相續を浄める心を修治することは、常に戒について[その条項を]数えるし、罪悪と煩惱を恥じるのです。

There are two subdivisions in the mind of the action of enlightenment: practicing the attitude of benefitting others and practicing purification of one's own mind. First, cultivate the mind to dedicate and give your body, wealth, and all the virtues of the three times for others' benefit and happiness. Second, practice purifying your own mind. Always watch your moral ethics and abstain from evil deeds and afflicting emotions.

試訳：菩提行の心を修治する

[第三:]菩提行の心を実践することは二つに細分化されます。

- 1) 他者を利益する態度を実践することと、
- 2) 自分の心の浄化を実践することです。

そのうち、第一[：他者を利益する態度を実践すること]とは、自分の身体と[自分が受け取るべき]資財と[過去・現在・未来の]三世の善根すべてを、他者の利益と幸せのために廻向し、施す心を育むことです。

[第二:]自分の心の浄化を実践することは、常に戒を注意して見守ることと罪悪と煩惱を慎むことです。

■廻向

「五重の道のマハームドラーの前行」テキスト 日本ガルチェン協会 p65-67

【普回向文】

この福德もて衆生全智を得 | 錯誤の敵をすべて降伏し |
生老病死の苦の波荒れ狂う | 輪廻の海よりともにまぬがれん |
文殊勇者は如来の智慧を持ち | 普賢菩薩もまたまたそのごとし |
すべての菩薩の跡を学びつつ | すべての善をあまねく回向せん |
ブツダの三身証得する加持と | 不変のダルマの真理を知る加持と |
和合サンガの堅固にある加持で | 回向のままに祈願よ成就せよ |

【ディクン・カギューの回向文】

我と迷悟の有情らが | 三世に積重せるものと |
本有の善根とによりて | 我と一切有情とが |
速やかに無上正等菩提宝を得んことを |

本文：白黒の八つの法を取捨すること

第五：「黒の四つの法を捨てて白の四つの法に依ることを学ぶ」という、その菩提心を忘れないその方便を説明するなら『菩提道灯論』にもまた、「これを他の生においても念ずるために、述べられたとおりの学を守護するのです。」と説かれています。

学はどこに説明されているかは、『迦葉所問経』に、「それもまた黒の四つの法は、すなわち、カーシャパよ、菩薩が四つの法を具えたなら、菩提心を忘れるでしょう。四つは何かというと、すなわち」などと説かれています。

それらの義をまとめるなら、

- 1) [親教師と]上師と供養されるべき者を欺いたことと、
- 2) 他者が後悔する処でないことについて後悔を生じさせたことと、
- 3) 発心した菩薩に対して瞋恚をもって悪評を述べたことと、
- 4) 有情に対して ^{あざむき} 諂 ^{ごまかし} ・ 誑 をもって行動することです。

5.Rejection of the Four Unwholesome Deeds and Acceptance of the Four Wholesome Deeds. Fifth, training in rejection of the four unwholesome deeds and acceptance of the four wholesome deeds is the method of not forgetting bodhicitta. The *Lamp for the Path to Enlightenment* says:

One should fully protect the training as it is explained

In order to recollect this bodhicitta even in other lifetimes.

Where is this training explained? The *Kashapa-Requested Sutra* says:

The four unwholesome deeds are stated. Kashapa, the bodhisattva who possesses four qualities will forget bodhicitta. What are these four? These are: ...and so forth.

Abbreviated, these are: deceiving the lama and those worthy of worship; causing remorse in others when remorse is not appropriate; through aversion, saying improper words about a bodhisattva who has cultivated bodhicitta; and behaving deceitfully toward sentient beings.

瞋恚 自分の心に違うものを怒りうらむこと。怒り。

誑（おう） 他人をあざむき、だますこと。

誑（おう）（梵: māya、マーヤー）は、仏教が教える煩惱のひとつ。

欺瞞[1]。自分だけの利益や世間の評判（名聞利養）を得ようとして、様々なはかりごとを心に秘めて、自分が徳のある人物であると見せかける偽りの心である 出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia) 』

諂（てん） へつらうこと。おもねること。本心をかくして従順をよそおうこと。

諂（てん）（梵: śāthya、シャーティヤ）は、仏教が教える煩惱のひとつ。

心の邪曲[1]。へつらうこと[2]。自分だけの利益や世間の評判（名聞利養）を得るがために、他者をだまして迷わそうとして、私心を隠して人に媚びへつらい等など従順を装い、人の心を操縦する心である。もしくは、このような手段をもって、自分のなした過ちを隠蔽せんとする心である。 出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia) 』

試訳：白黒の八つの法を取捨すること

第五：「**四つの不善の行いを拒むこと、四つの善の行いを受け入れることを修行することが菩提心を忘れないための方法**です。『菩提道灯論』に、

「他の生でもこの菩提心を思い出すために、説明されているようにその修行を完全に守る必要があります。」と説かれています。

この修行がどこに説明されているかという、『迦葉所問経』に、

「**四つの不善の行い**が述べられている。カーシャパよ、菩薩が四つの性質を備えたならば菩提心を忘れるだろう。これらの四つとは何かという、」などと説かれています。

これらの内容をまとめると、

- 1) 上師と崇拝に値する人々を欺くこと
- 2) 他者が後悔することが適切でないときに、他者に後悔を生じさせること
- 3) 発心した菩薩に対して、瞋恚をもって不適切な言葉を言うこと
- 4) 有情に対して欺き偽るような振る舞いをする事

【参考】

「ラムリム伝授録II」共著 グシェー・ソナム・ギャルツェン・ゴンタ、藤田省吾 チベット仏教普及協会 p177-178

(4) 他生において菩提心を維持する

また、現世だけでなく、この先の人生でいかなることが起ころうと「菩提心」を捨てないと仏菩薩の前での誓った事実を軽んずるわけにはいかない。そして、『菩提道次第広論』によれば、「他生（この先に続くいくつもの転生）」において菩提心（発願心）を維持し発展させるには、四種の悪法を断ち、善法によって資糧を積まねばならないとしている。これは『大宝積経』「迦葉品」に依拠している。

a. **四種の悪法**

では、四種の悪法とは何であろう。「迦葉品」には、次のように説かれている。

カーシャパよ、菩薩はつぎのような四つのあり方をそなえているとき、

彼の菩提（さとり）を求める心（菩提心）は混迷する。四つとはなにかといえば、すなわち、

- (1) 師匠（阿闍梨）や師長や布施をささげるのにふさわしい（尊敬すべき）人々を欺くこと、
- (2) 他の人々に（実は）後悔すべき（ほどの過失）はないのに、（その人たちを非難して）後悔を生ぜしめること、
- (3) 大乘に向けて志をおこした衆生たちを誹謗し、不名誉にし、その悪評や悪名をひろめるようなことを語る事、
- (4) 他の人に接近するのに虚偽と邪曲をもってし、深いまことの志をもってしないこと。

『大乘仏典 9 宝積部経典 長尾雅人 桜部建 訳』中公文庫より

白の四つの法もまた、すなわち、[『同経』に]「カーシャパよ、菩薩が四つの法を具えたなら、生ずべてにおいて生まれた直後に菩提心が現前になるでしょう。菩提の心髄に至る間に棄てて忘れることにならないでしょう。四つは何かというと、すなわち」などと説かれています。

それらの義をまとめるなら、

- 1) 知りながら命のためにも偽りを語らないこと[・不妄語]と、
- 2) 一切有情を善に立たせるし、それもまた大乘の善に立たせること、
- 3) 発心した菩薩を讃えて、仏陀との想いを生じ、その功德を十方に述べることと、
- 4) 一切有情に対して 謔^{めざわ}・誑^{ごまかし}をもってではなく、優れた思惟(増上意樂)をもって住することです。

The four wholesome deeds are also explained this way:

Kashapa, the bodhisattva who possesses four qualities will remember bodhicitta immediately upon birth in all other lifetimes until he obtains the heart of enlightenment. Which are these four?

These are:...and so forth.

Abbreviated, these are: not telling lies consciously even at the risk of one's own life; generally establishing all sentient beings in virtue, particularly in the virtues of the Mahayana; seeing bodhisattvas who have cultivated bodhicitta as Buddhas and proclaiming their qualities in all the ten directions; and sincerely maintaining the altruistic attitude toward all sentient beings.

増上 力が加わり増大して、強大であること。
意樂 心になにかをしようと思いたいこと。心に思う願い。

『ダライ・ラマの仏教哲学講義』ダライ・ラマ 14 世デンジン・ギャツォ著 福田洋一訳 大東出版社 p176 より

優れた利他の心(増上意樂)

試訳

四つの善の行いもまたこのように説明されている。

「カーシャパよ、菩薩が四つの性質を備えたならば、悟りの心を得るまで他のすべての生に生まれた直後に菩提心を覚えているだろう。四つは何かというと、すなわち」

これらの内容をまとめると、

- 1) 自分の命を危険にさらしても、自覚しつつ嘘をつかないことと、
- 2) 一切有情を善に立たせるし、特に大乘の善に立たせること、
- 3) 発心した菩薩を仏陀であると見て、その功德を十方に述べることと、
- 4) 一切有情に対して欺き偽るのではなく、優れた利他の心を保ち続けることです。

【参考】

「ラムリム伝授録II」共著 ゲシェー・ソナム・ギャルツェン・ゴンタ、藤田省吾 チベット仏教普及協会 p 179

b.四種の善法

これに対する善法には四種ある。『同経（＝大宝積経）』『迦葉品』には次のように説かれている。

カーシヤパよ、菩薩はつぎのような四つのあり方をそなえているときは、いかなる生に生まれるとしても、生まれるやいなや彼には菩提を求める心が現出し、（やがて）さとりを開く座に座するようになるまでのその途中で、その心が混迷してしまうことはない。四つとはなにかといえば、すなわち、

- (1) たとえ生命のためであっても、あるいは冗談のつもりであっても、それと知りつつ嘘をつくことはない。
- (2) すべての人に対して、その身近にあるときは、深いまことの志をもって接し、虚偽や邪曲を去る。※タルゲンでは4番目
- (3) すべての菩薩に対して、師（仏陀）にほかならないという思いをおこして、いたるところで、彼らのためにその真実を讃えることばを語る。
- (4) もろもろの衆生を（教化して）成熟せしめ、彼らがすべて、局限された教え（すなわち小乗）を求めることなく、この上ない正しい菩提にいたるように励ます。※タルゲンでは2番目

『大乘仏典 9 宝積部経典 長尾雅人 桜部建 訳』中公文庫より

第一の善法は、対象は有情である。行動は誰に対してであれ（一切衆生を）、たとえ笑いのためであろうと欺くよううそをつかないことである。そうすることで、管主や規範師や上師を欺くことにはならないという。

第二の善法は、対象は有情である。行動は自分が教え導く対象は誰であれ、殊勝なる心（増上意樂）によって差別することなく、仏の境地に導こうと努力すること。これは第四の悪法への対抗手段になるという。

第三の善法は、対象はあらゆる菩薩である。行動は仏陀と思ってすぐれた行為を称讃すること。凡夫である私たちにはどこに菩薩がいるか、誰が菩薩であるかが判断できないため、有情であれば誰であろうと仏陀であるとの思いを抱き、すぐれた点を称讃することが求められる。これが第三の悪法への対抗手段になるという。

第四の善法は、対象は自身が教化すべき有情である。行動は小乗に向かわせるのではなく無上正等覺を求めさせることである。これが第二の悪法への対抗手段になるという。

そのうち、**黒の法の第一のその義を説明する**なら、上師と親教師と規範師と布施処など供養されるべき者たちに対して欺く心により妄語して騙したなら、彼らが感受しても、感受しなくても、喜んで、喜ばなくても、食べるのが多くても、少なくても、騙すべきでも、騙すべきでなくても、更の度量を超えて対治が到らないなら、菩提心を喪失するのです。その対治として白の法の第一は、知りながら命のためにも嘘を語らないこと（不妄語）それに住すべきことです。

Explanation of the first unwholesome deed. When one deceive the spiritual master, abbot, master, or one worthy of offerings by telling a lie with an insincere mind, your bodhicitta is lost if the antidote is not applied within a session whether they are aware of the lie or not, whether they are pleased or not, whether it is big or not, or whether they are deceived or not. The first wholesome deed is its antidote. Desist from consciously telling lies, even at the risk of your life.

試訳

第一の悪法を説明するなら、上師と親教師と規範師と布施をささげるのにふさわしい人に対して不誠実な心で嘘をつくことによって欺くとき、彼らが嘘を知っているかどうか、喜んでいるかどうか、大きいかどうか、騙されているかどうかにかかわらず、修行に対治が適用されていないなら菩提心を失うのです。**第一の善法がその対治となります。**1) 自分の命を危険にさらしても、自覚しつつ嘘をつかないこと

黒の法の第二それを説明するなら、他の者たちが善の業を為したのに対して、後悔を生じさせる思惟により、後悔を生じさせたのです。[すなわち]彼は後悔を生ずべきでも、生ずべきでなくても、更の度量の中に対治が到らなかったなら、菩提心を喪失するのです。その対治として、白の法の第二、一切有情を善に立たせるし、それもまた大乘の善に立たせることに勤めるべきです。

Explanation of the second unwholesome deed. When someone performs virtuous deeds and you intend to make them regret it, your bodhicitta is lost if the antidote is not applied within a session whether they actually feel remorse or not. The second wholesome deed is its antidote. Establish all sentient beings in virtue, particularly in the virtues of the Mahayana. (Note: Chen-ngawa and Chayulwa specified virtuous *Mahayana* actions. Ghayondak said either *Mahayana* or *Hinayana* actions. Take, for example, the practice of generosity. The way of giving is virtuous, but if you get hungry tomorrow and have to go begging and so forth this can cause regret.)

試訳

第二の悪法を説明するなら、他の者たちが善い行いをしたのに対して、後悔させようとする思いにより後悔を生じさせた時、彼らが実際に後悔してもしなくても、修行に対治が適用されていないなら菩提心を失うのです。**第二の善法がその対治となります。**2) 一切有情を善に立たせるし、特に大乘の善に立たせること

黒の法の第三それを説明するなら、発心した或る人に対して瞋恚により彼の過失を述べるのです。それもまた、ふつうの過失から述べても、法の過失から述べても、面前でも、隠れてでも、特定しても、しなくても、穏やかにでも、粗くでも、聞かれても、聞かれなくても、喜んで、喜ばなくても、更の度量の中に対治が到っていないなら、菩提心を喪失するのです。その対治として、白の法の第三、発心した菩薩について仏だとの想いを生じ、彼の功德を十方に述べることに努めるべきです。

Explanation of the third unwholesome deed. When, with hatred, you use improper words with a person who has cultivated bodhicitta, bodhicitta is lost if the antidote is not applied within a session whether you expressed ordinary faults or faults of the Dharma, whether directly or indirectly, whether specific or not, whether gently or harshly, whether they heard it or not, or whether they were pleased or not. The third wholesome deed is its antidote. See bodhisattvas who have cultivated bodhicitta as Buddhas and make efforts to proclaim their virtues in all the ten directions.

試訳

第三の悪法を説明するなら、発心した人に対して瞋恚をもって不適切な言葉を使うとき、あなたがふつうの過失から述べたとしても、法の過失から述べたとしても、直接的でも間接的でも、具体的でもそうでなくても、穏やかでも厳しくても、彼らが聞いていてもいなくても、喜んでいてもいなくても、修行に対治が適用されていないなら菩提心を失うのです。第三の善法がその対治となります。3) 発心した菩薩を仏陀であると見て、その功德を十方に述べることに努めるべきです。

黒の法の第四それを説明するなら、どの有情に対しても^{あざむき} 詔・^{ごまかし} 誑の思惟をもって欺瞞を行ったのです。彼が感受しても、感受しなくても、彼を害しても、害しなくても、更の度量の中に対治が到っていないなら、菩提心を喪失するのです。その対治として、白の法の第四、「有情に対して優れた思惟をもって住すべき」ということは、自利に捕らわれずに益したいと欲する思惟それを為すべきです。

[以上が、]『正法如意宝珠・解脱の宝の莊嚴』より、「誓願の発心の学処」を説いた第十章です。

Explanation of the fourth unwholesome deed. When, with deceit, you commit fraud toward any sentient beings, bodhicitta is lost if the antidote is not applied within a session whether he was aware of it or not or whether it caused harm or not. The fourth wholesome deed is its antidote. Maintain the altruistic attitude toward all sentient beings and wish to benefit others without considering your own profit.

This is the tenth chapter, dealing with training in aspiration bodhicitta, from The Jewel Ornament of Liberation, the Wish-fulfilling Gem of Noble Teachings.

試訳

第四の悪法を説明するなら、いかなる有情に対しても欺き偽りの心をもって欺瞞を行うとき、彼が知っていても知らなくても、害を起こしても起こしていなくても、修行に対治が適用されていないなら菩提心を失うのです。**第四の善法がその対治となります**。有情に対して優れた利他の心を保ち続けること、自利を考えずに他者を利益したいと願うことです。

【参考】

「ラムリム伝授録II」 共著 ゲシェー・ソナム・ギャルツェン・ゴンタ、藤田省吾 チベット仏教普及協会 p 178-179

第一の悪法は、対象は管主、規範師、上師、布施処であり、行為はおもに嘘などで欺くことによって成立する。

第二の悪法は、他者がなした善行を後悔させるようしむけることだ。対象は善行をなした他者である。行為は混乱をきたすような発言や態度によって成立する。結果的にそれが成功するか否かは問題視されない。

第三の悪法は、大乘に入った者を^{ひな}貶すことであり、対象は発願した者（菩提心を起こした者）であり、行為は相手の些細な欠点を取り上げて発言したり、過去に犯した行為を取り上げて擲揄することで成立する。これは犯しやすく、深い罪となる可能性を孕んでいるため、細心の注意が必要となる。私たちが懸命に善行を行なう努力をしても報われたと実感できないばかりか、むしろ悪い方に傾いていると感じるのは、前世における菩薩に対する怒り、軽蔑、貶すことが起因していると考えられている。したがって菩薩が傷つくような行為はなんとしても抑制せねばならない。また、誰が菩薩であるか見きわめることが困難であるため誰であろうと菩薩と思い、欠点は相手にあるのではなく自分自身の心の汚れの現れと思惟する心の訓練が重要になるとされる。この点に関しては仏教を学ぶ過程でことあるたびに師から注意を促される。

第四の悪法は、自分の欠点を隠し、すぐれていると見せかけるために行動するが、殊勝なる決意（増上意樂）によって行動しないことである。対象は他者であり、行為は^{きょう}誑（自己にすぐれた能力があるかのように欺こうとする心作用）と^{てん}諂（自己の過ちを隠そうとする心作用）による行為である。

【参考】

「ラムリム伝授録Ⅱ」 共著 グェシェー・ソナム・ギャルツェン・ゴンタ、藤田省吾 チベット仏教普及協会 p 180-181

これら四種の悪法と善法を挙げたのには、この人生だけを考えるのではなく、この先に続くいくつもの転生を視野に入れて、「菩提心」を維持しようとする意志を保たせる意図が読み取れる。いくつもの死と再生を通過してもなお、忘れることなく携えるべきものこそ「菩提心」だと認識する必要があるのだ。転生を超えていかなる生においても、いかなる行為においても、先行するものが慈悲に基づく菩提心であると意識することは菩提心を維持・発展するために必要となる。

ここに挙げた四種の悪法以外にも「菩提心」を失う原因として、他（衆生）を顧みないことと、自分には仏陀の悟りなど得られるはずがないと思込むなどが挙げられている。「菩提心」の定義の中に含まれる「生きとし生けるものを救済する」「仏陀の境地に到達する」という二つの目的を放棄しては「菩提心」が維持できるはずがない。

「発願心」が菩提心の基礎であり、いかに菩薩の誓願を果たし「発趣心」維持しようと努める菩薩であろうと、四種の悪法に手を染めれば菩薩としての誓願そのものを遺棄することになり、「発願心」さえも失う結果になると考えられている。したがって、「四種の力」をもって懺悔する必要がある。また、「**六加行**」が菩提心を維持・発展させ、六波羅蜜の実践の前提になっていると考えることができる。

四種の悪法と善法に関しては、菩提心の維持とは直接結びつかない唐突な印象があるが、有情のために自らが仏陀を成就するという心、いわゆる菩提心を考える場合の有情のためというときの「有情」は、ともすれば抽象的で崇高な有情になりがちである。「有情」という言葉を使っても、抽象化された有情であり実際の有情とは異なる崇高な存在としての有情であれば有情のために自らが仏陀を成就するといっても、本質の抜け落ちたものになってしまう。実際の「有情」の中には敵もいれば悪人もいる。他人の不幸を喜ぶ煩悩にまみれた者も多くいる。具体的な「有情」とは、それらをすべて含めた存在である。大乘者が有情のためというときの「有情」とは具体的な有情に他ならない。このように有情に関する認識を新たにするために四種の悪法と善法を示したのであり、抽象化しやすい心を日常の具象の地平へ引き寄せる意味と、菩薩戒を護持する意味から重要であると考えられる。有情を捨てないこと、師を敬うことは菩薩戒としてもっとも大切な項目であり、それに背くことは根本重罪になる。それを犯せば他生で菩提心を維持することは困難になるからであろう。

六加行 「六加行法」は、『現観莊嚴論』の実践的な秘訣として説かれたもので、『菩提道次第論』の教えに沿った内容となっています。「加行」とは、仏道修行を実践する際の入門となる、準備的な前行です。

「実践チベット仏教入門」クンチョック・シタル ソナム・ギャルツェン・ゴンタ 齋藤保高 著 春秋社 p 42

「五重の道のマハームドラーの前行」テキスト 日本ガルチェン協会 p14

【菩提心をおこす】

ディクン・カギューの利他心の祈り

われを恨む怨敵も | 妨害する邪鬼も |
解脱と全智の障害となる一切の者たちも |
虚空と等しき母なる一切有情なれば樂を得んことを | 苦を離れんことを |
すみやかに無上正等菩提宝を得んことを |